

## 小学科の思い出

元小学部長 外崎 長三郎

(昭16年1月～41年10月在職)

於 小学部講堂(1981年)

十何年ぶりにこの壇の上に立ちました。なつかしいです。私は今もお話にありましたように丁度40年前の1月30日に東京に出て来ました。その頃は天皇を生き神様とした時代でした。それで私は毎日讚美歌を歌って礼拝をしてから学校が始められる、そういう学校へ行きたいと思ってやって来たのです。そして、いくら経たないうちに戦争が始まってしまったのですけれども、その頃の小学部の話を少ししましょう。

この学校の建物に移ったのは昭和29年ですから、その前は今高等部の入っている向うの建物、東洋英和女学校と呼んで居りました玄関から見て、その一番奥の方の一階と二階でした。運動場に寄ったところの教室に1年から6年まで各学年1クラスずつありました。礼拝は今の小講堂で毎朝やりました。音楽室もなかったので、そこで音楽の勉強もしました。あの建物は昭和8年に出来ております。今は少しぼろになりましたが、東京には他にないような大変立派な建物でした。その中に幼稚園師範科もいて、全部で700人位でしたでしょう。そのうち小学校は200人位でした。図書室は小さくて15人位しか入れない図書室でした。体育館はありませんので女学校と一緒に使いました。今日は小学校、明日は女学校と代わる代わる使ったのですが、遊びたい時期の小学生が女学生が使う時に行って叱られて泣いて帰ってきたようです。卒業式は女学校も皆一緒、運動会も一緒にやりました。運動会は今中学部のある所に崖



遠足 三保の松原 (S17年)

があったりして小さな運動場でした。この講堂より少し大きい位でした。その隅に教会がありましたが、学校は土曜日が休みで日曜日には生徒が渡り廊下を通して教会に行っていました。

私は丁度40年前の2月1日に学校に来ました。そしてその4月1日から小学校は全部国民学校というのになってしまいました。ところが残念なことに私立小学校は国民学校と呼んではいけないと撥ねられたんです。仲間に入れてくれないのです。そしてどう呼んだかという東洋英和女学校附属初等学校と呼ばされました。そのあとで東洋永和初等学校とも名前が変わっています。英和の「英」は英国の「英」だからといって「永」に変えました。その頃は礼拝も宮城に向かってお辞儀してそれで終わりました。

戦争がひどくなって疎開もしました。今小学部には「敬神奉仕」の額がありませんけれども、軍

人や文部省のお役人が来て、学校を調べて、「この神様はどこ神様だ」というのです。

さて、小学校は昭和29年に移ってきましたが、今居る食堂の下の辺りは大きな池があっておたまじゃくしが泳いでいました。今の保健室の辺りは東久邇宮様が住んでいらした所で、そのご長女は東洋英和を卒業しておりますが、そういう場所でした。

昭和20年5月24日の夜だったと思いますが、アメリカのB29が学校の庭に焼夷弾を落として校庭を火の海にしました。私はちょうど疎開先から帰って、学校の保健室に泊まっていた時です。夜中に起きてみましたが高等部の窓ガラスの割れたところのカーテンが何枚か焼けていました。私は学校を全部見回ってカーテンを引きちぎりました。用務員の荒井のおじさんは腰をぬかしそうになりました。裁縫室(今の家庭科室)にお蒲団がありました。そこで腰をぬかしました。次の日、屋上にも爆弾が落ちました。全部で34発落ちていました。その時とその前の晩の窓を閉めた時思いました。建学のために一生懸命になっていたお金の大部分は、カナダの人から宣教師が集めて持ってきたお金です。

窓には針金が入っていたのでこわれませんでした。

た。「ありがとう」と口には出さなかったけれども、これでなかったら火が入ってしまったなと思いました。屋上も小さな爆弾でしたから34個落ちたけれども穴はあきませんでした。ありがたいなと思いました。昭和19年の11月でしたでしょうか。やっぱり疎開から帰ってきた時に、お昼、敵の飛行機がやってきて戸口に一発落としました。それでも英和は焼け残りしました。

東洋英和も59年に100年になります。そういう時に皆さんはカナダの人が100年前に建ててくださったそういう学校を思っていた方がよろしいと思いますね。私も37年にトロントに行きお礼を言ってきました。

皆さんは東洋英和に入ってよかったと思っているでしょう。土曜日がお休み、それもいいと思います。砂の上に家を建てる勿れ、岩の上に建てた家は壊れない——と聖書はおっしゃっているでしょう。だから皆さんは、ほんとうの神様を思いながら成長して行って欲しいと思います。最後に私の好きな聖書のことをば引いて終わります。

新約聖書ピリピ人への手紙2章4節

「おのおの自分のことばかりでなく、他人のことでも考えなさい。」

## 三代つづきの英和の子

龍 子 (旧 水野)

1942年(S17年 小学科卒)

私の母・さだ(大正11年卒)、その妹・杉浦恭子(大正14年卒)、宮川誠子(昭和3年卒)、ともに私の先輩である。

1936年(S11年)私は付属幼稚園を経て小学部へ進んだ。

私たちの小学校時代はこの時から卒業に至るまで、父の願いもむなしく、戦争が次第にひろがっ

て行くのだが、まだ幼い私たちには、まわりを取り巻く暗雲は見えなかった。

低学年のころの、英和らしい風景といえば、ハミルトン先生の英語の時間。きれいなカードを次々に見せられて、発音を繰り返した。クリザンセマム、バタフライ、等々。そして短かい歌も習った。「レッツ ユア ハンド ゴー クラップ、

クラブ、クラブ…」なまじ両親が多少英語ができることと、多くの先生がたに赤ん坊の頃から知られているという負いめから、のちに一ばん苦手となった英語の授業もこの頃はまだ楽しかった。

キャフェテラスの神秘的なうす暗さ、ひんやりした空気、ろうかを通して押し合いながら行くお昼の時間。どんなものを食べたっけ？

お昼休み「お山」と下の運動場を使って遊んだ。縄とびをすれば、しじゅう引っかかって万年お持ち。ゴムとびでも、大波小波でも、くまさんくまさんでも同じだった。そして上手に飛ぶ友だちを感心して眺めていた。それからネクタイを被ってのオニババごっこもよくやった。すると、大ていの場合、私にはオニババのお付きの役がまわって来る。お姫さまがさらわれて来て、(この役も大てい決まっていた)私が見張りを命じられる。オニババがちょっと出かけているすきに、お城からお姫さまを取り戻しに来る。両方から手を引っ張り合っってキャーキャー言ったあげく、お姫さまは連れ戻されてしまう。そこでオニババ役の誰かが、「駄目じゃないの、水野さん」と私を責める。「止めたっど…」すねる私、というワンパターンなのだった。

そして、私はみんなから少し離れて、校門に近い石段に腰をおろし、ひとりで空想にふけり始める。始業のベルが鳴るまでそうして、さてと腰を上げる…と、上級生を中心に活発な10人くらいが、大きな輪を作ってかけて来る。「取り巻き」という、意地の悪いゲームだ。私は可愛げのない子で、しょっちゅうねらわれた。くぐろうとすれば手をおろしてさえぎられ、またごうとすれば、手を上げて通せんぼ、の繰り返しうちに、本鈴が鳴る。ついに私は誰かの手に噛みつく。輪がとけて、みんなが走り出す。誰かが私をにらんでいる。誰かは私の足を踏む。くやしさと、悲し

さとで胸をいっぱいしながら、私も一ばんあとから走る…。

よく、教室に残って、絵を描いて遊んだ。かんざしをひらひらつけたお姫さまの絵のうまい、Fさんが、「へえー、あなたはそんな絵が好きなの」とからかう。私は手で囲いながら、とりとめのない、いたずら書きをする。

1939年(S14年)この年から、受持ちが変わって、中沢先生になった。

転校して来た人があって、クラスのふんい気は多少変わったが、成長期になっても(親わずりか?)小さい私は、一ばん前の席にいることに変わりはなく、ボールあそびは全然駄目だった。ほんとは負けず嫌いなので、かなわないとわかることには始めから遠ざかっていたのだ。

好きだったのは音楽。図画。作文。それ位だったかな。絵は、Fさんには叶わなかったけれど、関先生が好きで、近いものだからお家へも一度、遊びに行ったような気がする。ガラス板にケント紙を黒く塗って貼り、(かげ絵)スライドを作ったのを覚えている。授業が終わってもぐずぐず残って、3人くらいで、後片付けを手伝ったりすると、先生は特別に色紙の端切れなどをわけて下さる。きれいなツヤ紙やセロハンは、何に使うあてがなくても、うれしかった。厚紙をひし形に切って、貼り重ねて箱を作ったことがあった。鉛筆をとがらすのが下手で、指先を汚し、定規はずれ、どうしても角と角が合わない。いびつになった箱に、むらな色を塗って、いつものようにみんなより遅れて仕上がる。それでも図画の時間は好きだった。

牧師館の悦ちゃん私より一つ上で、お姉さんを欲しかった私と、ある時期よく遊んでくれたものだ。彼女は館の紙や色紙を貯めていて、私にもわけてくれたし、着せ替え人形を作るのが得意だった。(ずい分大きくなっても、私は着せ替え人

形をねだって、笑われた)。

まさよちゃんが、押しくらまんじゅうのすべり台から落ちて引きつけたときのこわかったこと。助け上げた上級生の赤木さんが、とても大人に見えたこと。

1940年(S15年)なぜか前年参加しなかった、野尻湖のキャンプに、始めて家を離れて参加した。4年生、6年生にはさまれて。先生が禁止か、制限されたおやつをみんながたくさん持って来ているのに驚いた。トランプはババぬきしかやれず、車中も皆から離れていて、初めの期待は、だんだん心細さに変わっていった。

ボート小屋の栈橋につかまって、バタ足の訓練があった。全然泳げない私が、運悪く一ばん深い方になった。水ごけの生えた板はヌルヌルしていて、ちょっとバタバタやったら、あっという間に手がすべって、ブクブクと沈んでしまった。夢中で、差し出された先生の手を握った。—ようやく這い上がった私は、それから二度と泳がなかった。

上級生が、「水野さん、泳がないなら服の番をしてよ」と言う。ここでも私は万年お持ちの役を引受けた。幼稚園のときいっしょだった一級下の人と同じ部屋になり、そんなに親しくはなかったのだけれど、他の人のまねをして、彼女をニック・ネームで呼んだら、「いやーね」と言われてしまった。あれ以来、私はなるべく誰を呼ぶのにもフル・ネームで呼ぶように気をつけている。小さいなことでも、小さい時のできごとって、抜けないものだ。

このキャンプで、理科の松原先生が、箱根で実際にあった話、とか言って、怪談を聞かせて下さった。ベンチに並んでいたみんなが、だんだん身体をくっつけて坐り直す。つるされた石油ランプの淡い灯が、壇上の先生の、白衣の上半身を浮かび上がらせて、演出効果満点だった。突然誰かが

ワーッと泣き出し、中沢先生がそれをなだめていらっしゃる声を聞きながら、そんなときに限って私はちっともこわがらないのだった。

この頃はまだ、家庭のガス風呂が使えたせいもあって、よその人とお風呂に入るのに慣れていない私は、みんながキャッキョッと楽しんでいるお風呂場の入口で立ちすくんでしまい、たぶん2晩だか3晩だか、お風呂に入らずじまいだったようだ。誰かが「水野さん臭い」と言い出して、二・三人が「汚い」とか「臭い」とか言うのと、私はもう、とてもたまらなくなつて、やみくもに家に帰りたかった。あげくは、泳げないのにあの湖を渡つてでも、と、泣きながら走り出した。…と、どんと何かに突き当たった。中沢先生の胸の中だった。先生はひとりぼっちの私を、一生けんめいみんなの中に入れようと、手を変え品を変え試して下さいました。いつも先の丸い鉛筆しか入っていない私の筆入れを見て、とうとう家まで来て、ナイフの使い方を教えて下さいました。算術のきらいな私のために、教室に残して何回も、おさらいして下さいました。でも私は、先生が思われるほど、ひとりぼっちが辛かったわけではなく、そのために学校を休もう、なんてあまり思わなかった。でも、寝坊したときだけは、休んじゃおうかな、なんて考えたこともある。何しろ、歩いて数分のところに住んでいるのだから、遅れて行くのはみっともないのに、私は全くよく遅れ、また、忘れものを取りに帰ったものだ。

あるときは、3～4人で私のランドセルと運動靴をかくしてしまった。私は怒って、靴下はだしで家へ帰って来てしまい、あわてた友だちが返して来てくれても、とうとう玄関まで出て行かなかったことがある。

4年生になって、初めておかっぱの髪を分けてピンでとめて見た。おでこがむき出しになって、

丸い顔が、ますますまん丸くなったが、ピンで止めるということが、少しは大人に成ることのようで得意だったのだ。そしたら学校の廊下で、津川先生に呼びとめられた。

「あらひろこちゃん、いつから髪、分けたの」先生が、ちゃんと私の変化を認めて下さったのが嬉しかった。でもこの、「あら、ひろこちゃん」という、先生がたからの呼びかけが、じつはくせものなのだった。先生がたの方には、何の他意もないことは分かっている。だから、始めのうちは、学校もうちも教会も、私にとっては一つの世界として、つながっていた。いくぶん、得意ですらあった…。だが、あるとき、ふと、私は気がついたのだ。「お父さまはお元気?」「おばあちゃんは、この頃どうしていらっしゃるの?」などと、声をかけて下さる先生がたに代えて、うれしそうに立ち止まる私の傍を、さっきまで並んで歩いていた友だちが、すっと通り抜けて行ってしまふのだ。私は先生に声をかけられそうになると、急いで廻り道をしたり、顔をそ向けたりするようになった。母がいっしょにいる時など、いっばしの大人のつもりでいる私に「ほら〇〇先生よ、ご挨拶なさい」なんて言われると、よけいかたくなになってしまう。おしまいには、自分が出来ないはずらを、友だちの誰かがしていると、(たとえば、鉄の門



S 16年 中沢先生(中央)大滝先生(右)

扉に掴まってすーっと動かしたりとか、じっさい危いあそびやいたずらもあった)先生に告げ口するのである。なかにはほんとに他愛ない、子どもらしいいたずらもあった。でも私には、なかなか冗談が通じなかった。先生がたの前でいい子でいた方がトク、という気持と勇気がなくてやれない、ということがあって、それから屈折した気持は、私よりもっといじめられている人への接近、共同戦線を張る、あるいは、いっしょに孤立するみちを選ぶ、という形になった。

1941年(S16年)野尻湖のキャンプは、英和のキャフェテリアの赤痢の発生という、思いがけない出来ごとによって終わりを告げ、変って、成増の額田先生の農園での、楽しい土いじりがあった。祖母がにわとりを飼ったり、野菜を作ったりしていたので、私も草とりを手伝うことがあって、お世辞や気遣いのいらぬ自然との触れ合いは、私を素直にさせてくれた。もう、修学旅行も遠出の出来ない時代になって、私たちは箱根への日帰り旅行とか、遠足に毛の生えたていどの旅行がやっとだった。父は海軍を止めて宮内省に勤務していたが、「大東亜共栄圏」のあたらしい元首たちが訪れてくると、その接待役を仰せつかり、忙がしくとびまわるのだった。それがどういふことなのか、私にはよくわからなかった。

丸山伝太郎さんという方の紹介で、中国からの留学生を預かったりしたのもこの頃ではなかったかと思う。うちの応接間の床に、掘りごたつが作られ、中国語の講習会が開かれるようになって、NHKのテキストをもとに、私も末席に連なったりした。ジャーナリストと結婚して中国へ渡る予定だった、銀座教会の笠置八千代さんが、熱心に見えていたように記憶している。バイブル・クラスもささやかに続けられていて、時局を知り過ぎている人の、ここは静かな別世界であつたらう。

12月8日、つまり私の12才の誕生日の翌日、大東亜戦争と呼ばれ、また、大太平洋戦争と呼ばれた、アメリカとの対決へと追いこまれてしまった。私たちは講堂に並んで、「まことに止むを得ぬこと」と言われる陛下のおことばを聞いた。

私にはわかにか、いっばしの愛国者となって、竹ぼうきをついで八幡神社の清掃に出かけ、お向かいの檜橋さんや、そのお隣りの石橋さんを誘って、「飯永子どもとなり組」なるものをでっち上げ、自ら組長と称して空缶集めなど始めた。いくつかたまと、海軍省まで届けに行く。お返しは三笠艦にゼット旗のひるがえる、日本海々戦のあの図なのだった。— その2年後の夏、父は依頼応召という非常手段によって宮内省を去り、海軍軍人に戻って…ラバウルに向かって飛び立ったまま、ついに帰って来なかったのである。

昨1982年春、母さだは病いをおして、母校と教会の百年史の原稿を書き、それが一つの区切りとなって、それから一年を待たず亡くなった。父にも母にも、もっと聞いて置きたいことが伝えておきたいことがあったと思う。私たちを狩り立てたものは何だったか。未解決のまま放り出されて、50才を過ぎて、まだ大人に成り切らずに

いるようだ。

私にとって、三代続きの英和っ子ということが、ある時期、非常に重荷だった。こうしてふり返ってみても、とりわけ小学科〜初等科へ、英和から永和を経てまた英和へという、転変の激しい時代を英和に過ごして、昔父母が願ったような、いわゆる英和らしい英和ではない時代のただ中を通り過ぎてしまったことが、悲しく思われる。そして、いまは、これからは、どうなるのだろうか。輝やかなしい伝統の、歴史のなかに、できれば忘れてしまいたい暗い部分もある。でもそれらを踏みこえて、やっぱり英和が持っている宝が、ひとりひとりに受け継がれて行くのだと思う。日常の、何気ないできごとのなかで、解決を迫られるときに、幼ない日、耳にしたり、口ずさんだりしたさんび歌や聖書の一節が、バツとひらめくことがある。思いがけぬほどの安堵感や勇気が湧いてくるのだ。

死と直面せざるを得なかった母が、まだそれほど激しい痛みがなく、不安と孤独にせめられつつ、ふと本音らしい言葉を洩らしたことがあるが…「さんび歌を歌っていると、勇気が出て来るのよ」それを理解できる、と感じるのは、私も英和っ子だったからではないか、という気がしている。

## 中 沢 先 生 の 思 い 出

田之上 浜 子（旧 谷口）

S17年 初等科卒

時はそれぞれの人々に、さまざまな思い出をおりこんでいく。或時はその思い出をなつかしみ、又或時は思い出によって支えられる。

昭和14年私達は初等科4年生の春を迎えた。あの頃先生は三十と少し位でいらしただろうか。白い衿元をきっちり重ね袴をはいた先生の姿、本を片手に持って背中を真直ぐにのばして真面目と云う字を体で書いているみたいだなーと子供心に

思った。学校での一日は朝の礼拝に始まる。それは皆がどうにか大人しく出来る時間であった。階段を上って上の教室に入る頃はもうガヤガヤとさわがしくなる。誰かが先生の足音を聞きつけてシーと合図をする。にっこり笑って入っていらした先生の顔を見て何となく安堵感をおぼえ、「おはようございます」と大きな声の合唱となる。先生は四十余人のオカッパ頭をくると見廻して其の

日のお休みの生徒をみつけ、様子をたずねたり等しながら1時間目の授業が始まる。理科、英語、音楽、図画、裁縫、を除いてはすべて先生に教えていただいた。どの課題も白いチョークの粉をあびながら全力投球して熱心に指導して下さったが、特に作文にはより以上の力を入れていらした。当時としては珍しくレポートの作り方、劇の作り方を教えて下さった。一つのテーマで一学期間書き続けていようと何も云われなかった。そして克明に読んで下さり、誤字を直し、又続きをどうしても書きたくなる様に賞めて下さるのだ。皆得意になって教室以外でも良い作品がどんどん生れた。古い小羊をひもどけば、きっと其の中の二つや三つは見出す事が出来るかもしれない。先生は作文の表現力よりも内容のあり方に目を向けられていた。何気なく書いた事の中から、その底にピカリとするものを目ざとく見つけられ、「ここなんですよ、ここをもっとほり下げて考えてみてほしいの」等と熱心に指導された。併し学科の成績に関しては何も云われなかった。私達が算術の点数が悪かった時等、自分の説明の仕方が不足しているのではないかと思われて、幾度もくり返してやり直し、特にわからない生徒には一人ずつ手をとって教えていらした。最も其の頃は成績簿と云うものはいただかなかった。一人ずつの面接があっただけで卒業の時に始めてA、Bのランクづけがあった様に記憶している。思えば良き時代であったのだ。只先生は一人一人の人格形成には神経質な程心を配っていらした。心ない噂話をして人を傷つけたり、グループで友達をいじめたり、うそをついたり等と云う事があればすぐに放課後其の子供達を呼び出して諄々と諭され、或時は涙を流して注意をあたえていらした。そして先生の眼は後にもついているのではないかしらと思われる程学校に於ける皆の状態をよく把握されていた。何時

しか私達は先生の前では本当に素直になり切って自分のありのままを表現する様になっていた。家の中の事、友達との事、子供らしい悩み等、良く聞いていただいた。放課後、教員室の中に入っていて、先生の机の上にジャムの瓶があるのを見つけて、アーンと口をあけて一口入れていただいたり、「道草しないで早く帰るんですよ」と云う言葉を背中で聞きながらも何となくはなれがたくて甘えていた。

或日もう帰ろうとしていると小講堂から「乙女の祈り」の曲が流れてきた。そんなに上手じゃないけど誰かしらと思いつつそとのぞいてみると先生だった。楽譜と首っぴきで一所懸命に練習されていた。併しそれから数ヶ月経ってもやはり同じ曲であった。あゝ先生はきっと此の曲がお好きでこれだけをひける様にしようと思っていられるのだ。子供達を家路につかせた後、ほっと一息ついてピアノに向っていらっしやるその姿に私は先生の内側を垣間みる思いがした。

昭和16年、6年生になると私達をとりまく環境は日一日と緊迫してきた。楽しみにしていた修学旅行も出来ない時代となって、小春日和の一日を三保の松原への遠足となった。外崎先生と中沢先生に引卒された私達は此の時とばかりに遊べるだけ遊んだ。外崎先生に馬乗りになる人、中沢先生の手におら下がる人、無邪気に砂の上に寝ころがる人、実に楽しいひとときを過し、帰りには持てるだけたくさんの石垣いちごをおみやげに持って帰途についた。大きな戦争がずーっと続いてさまざまな苦勞が待ちぶせているとも知らず初等科の最後を満喫した。

昭和20年3月8日頃であったかしら、先生が疎開児童の卒業の事で帰京されていると伺い、早速初等科に会いにいった。モンペをはいた先生は元気そうに疎開先での事等話して下さった。「お

互いに元気でね、又会いましょう」と云って軽く手を握っておわかれしたのが最後となってしまった。先生は東京に帰るのをひどくおそれていらしたらしい。幾度も大丈夫かしらと疎開先で皆に念をおしていらしたそうだ。前日にゲートルの巻き方を外崎先生に教わってきちんと巻いて帰られたのも無駄になってしまうとは、— 敏感な先生がやはり一抹の不安を拭い去る事が出来ずに万全の準備をされていたであろうに。3月10日の大空襲は本所、深川方面を焼きつくしてしまった。たくさん犠牲者と共に先生とお姉様御一家は遂に何の消息も得られなかった。戦争の火の粉がこんなに早く私達の方にまで及んでくる等と云う事は

## 小 学 科 の 生 活

佐々木 敏 子 (旧 倉敷)

S 17 年 小学科卒

入学当時は何か式と云うと必ず英国国歌を歌った様な気がする。解らないながら耳から入るだけであったが聞き覚えで歌った。

まだクイーンでなくキングであった。古い話である。又「わが大和の／国を守り／あらぶる波を静め／世々安けく／治め給えわが神」と云う讚美歌が後に続いた。聖なる聖なるもよく式の時に使われた。

ミスハミルトンは余り日本語はお好きでなく勅語は櫻村先生が真白な手袋をなさって代読された。私達は校長先生が外人である事が珍らしいとも特別思わなかった。又友人の中に日本人ばなれした人が居ても全く異和感はなかった。もしも人種的偏見が生ずるとすればそれは先ず大人の社会から発生したものの影響であると私は思っている。むしろ子供の頃は栗色の髪に憧れる事はあっても英和で其の事がマイナスに働く事は無かった。

講堂での事は何と云っても毎朝の礼拝と日曜学

考えてもみななかったのだ。

終戦の翌年私達は初等科の一室で中沢先生の妹さんを囲んでささやかな追悼会を開いた。

外崎先生が選んで下さった讚美歌486番を合唱しながら誰もが声をつまらせているのだった。

幼い日に残された先生のおふれるばかりの愛情は其の後数十年にわたって私達の人となりを支え、友情のきつなを強めて下さっているのだ。

「どうしている？ みんな元気で仲良くやっているかしら」と生徒達を気づかって心配気に云われる先生の声が40年の歳月を越えて、今もなお、きのうの様にひびいてくるのである。

校が切り離せない。それぞれの教会で出欠を取った後讚美歌を持って（聖書は持たなかったと思う）静かに講堂へ行く。先生方は横壁に造りつけられた椅子に私達の方を向いて掛けられる。「主の祈り」も何時の間にか自然に覚えた。山上の説教の「幸なるかな…」もくり返すうちに体の中に入った。モーセの十戒、「わたしの他に何ものをも神としてはいけない、偶像を拜してはいけない、安息日を覚えよ、父母を敬え、殺すなかれ、汝姦淫するなかれ？？こんな言葉が解る訳が無い、けれども子供の感性とは不思議なもので大きな声で尋ねられない雰囲気のある言葉の事は知っていた。讚美歌と後付の交読文とあとは唯耳から聖書聞き先生のお話を聞くだけだった。教室へ戻ると、「先生、〇〇さんお祈りの時に目を開けていました」こんな事を云う子が居ると受け持ちの竹田先生はニコニコなさって「あなたは どうしてそれが見えたのですか」と仰云った。

公立の学校と異り土曜日はお休み、そして日曜日は十時から日曜学校が始まった。毎日の礼拝で一銭献金ではなく特別に五銭白銅や十銭の献金がうれしかった。私は歩いて通えたので首から紐をかけたお財布の中味は献金のためのお金しか入れる事はなかった。月末の日曜日は1ヶ月の各学年の献金額の発表があり、上級生の方が一年生〇円〇十銭、二年生×円×銭と云う具合に礼拝の最後に発表された。小さな金庫の型をした黒い献金箱は今でも目に浮かんで来る。そして其の献金は深川の愛隣館やハンセン氏病の病院等に六年生の代表によって年1回まとめて届けられた。恵まれた家庭の子供達も自分の知らない処で不幸な方達が生活している事がおぼろげに知る事が出来た。日曜日の礼拝で忘れられないのは別科の秋山先生が入場の時に電蓄をかけて下さる事だ。曲はウィリアムテル序曲が多かった。又六年生によるコワイヤは私にとって、こんな美しいコーラスがあるのかと胸をときめかせ、きっと六年生になったら私もメンバーになろうと思った。今から考えるといわゆる教会用の讃美歌を唱っていたのだけれど、黒くぶ厚な讃美歌の本と耳新らしいきれいなハーモニーにうっとりした。せいぜい十二三人位であったと思うが津川先生の弾かれるピアノのそばに集った六年生のコーラスは私にとって最高の音楽であった。私達の持っている日曜学校讃美歌は斉唱の譜しかついていなかった。けれども大好きな讃美歌は沢山あり中でも60番は物語り風で忘れられない。「小さい羊は家をはなれ／或日遠くへ遊びにゆき／花咲く野辺の面白さに／帰る道さえ忘れませんでした」そして最後にやさしい羊飼に抱かれて帰るその小羊が「よろこばしさに／踊りました。」で終る。この讃美歌を唱うとまるで自分が迷子になった様に心細くなり、助けられると羊と同じ気持ちでうれしくなって鼻の奥がツンとなるのだった。

樫村先生の日曜日のお話も大変面白く楽しみにした。ダビデとゴリアテの話、いなご豆迄食べた放蕩息子の話、お魚に食べられたヨナ、灰の中でオデキに苦しんだ信仰あついヨブ、キリストを信じて屋根から病気の友達を釣り下ろした話等、白紙の心に少くもつ神観念が形成されていった。

又母の日の礼拝には皆、先生から胸にカーネーションを付けていただいた。お母様の亡くなられた人は白、そうでない人は赤い花であった。今の学校教育では平等平等で白い花なんて区別するのは可哀そう…と云う事になるだろうが辛くとも真実を直視する大切さを教える事になったと思う。私達も日頃はお母様の有る無しなど意に介さないのに、其の日は白い花の友達に同情をよせた。それぞれが心のうちにそっと友をいたわる気持が自然に湧いたと思う。妙に甘やかさない昔の教育を尊いものと思っている。

遠足は春は谷津遊園に行く事が多かった。一年年だけでなく上下数学年一緒であった様に思う。午前中は潮干狩をしお弁当の後は苺摘と定っていた。お付添は何人でも許されていて母は良く女中さんの楽しみも兼ねて私一人に二人位つけて出した。潮干狩には足袋を持っていきじんわりと足が濡れて一寸気持ちが悪いけれど次々と貝が見つかる夢中になった。潮干狩が終って井戸で足を洗う時一人の女中さんに私は抱かれもう一人が洗ってくれて居る処を竹田先生にみつき「自分で洗いなさい。」と叱られた。苺畑は幼心にも美しいと思った。緑の葉陰に真赤な可愛い丸い実が敷藁の上になだれていた。今と違い一年中苺が有るなど考えられずほんの一時期貴重品の様にその時を楽しんだ訳だから籠一杯に摘んだ苺を大切にお土産に持ち帰った。帰りの電車に乗る前に野外礼拝をする。その時の讃美歌は見ないでも皆が唱える「山も野辺も空も／林も流れも／御神の御心をあ

らわに示せり」と云うので二番の「御手になりしものは／よろこびにおどる／あたりまではっきりして、われらも、もろともに／御恵みをうたわん」あたりは少しあやふやにザワザワと唱われた。一番だけの時もあった。楽しい一日の締めくくりを神に感謝し帰路につくのが定りだった。

雨の日の遊び場は石廊下と称する麻布教会へ通ずる一間巾位の長い屋根つきの吹き抜け廊下であった。屋根を支える柱にゴムを結んでゴム段をやったり蠟石で丸を書いて石ケリ、お国はどちらと云う花いちもんめに似た遊びなどをやった。一二年を受け持たれた竹田先生はいつも和服で紺の袴を召し、体操や皆と外で遊んで下さる時は、よくたすきをかけられた。こうして書いていると、どうも遊んだ事ばかり思い出して了うけれど勉強に関して公立校と違った事は、英語、聖書、話し方の時間があつた事だと思う。

一年生の英語は幼稚園の時の延長の様なものでリーダーもなく英語の歌や英語で足し算や引き算をやった。一月二月を覚えたり月火水木、数え方等だった。ミスハミルトンは指で数を御教える時日本人の逆に指を一二三と小指の方から開いていかれるのが珍らしかつた。すてきな黒の甲高のお靴と黒のアフタヌーンの様な洋服、スマートに袖口の処へしまわれるハンカチーフ等が印象に残っているが英語の勉強の事はトンと覚えていない。又話し方の時間は順番に前へ出て一人ずつ自分の覚えて来た話を聞かせると云うもので人前で恥しげに喋る事の訓練であつたと思うが予習も復習も無いので好きな時間であつた。忘れてたりつかえたりする友達の話を我慢して静かに聞くと云うのは今の教育に欠けて居はしないかと思う。時々私達がせがむと竹田先生がとっておきの面白いお話をして下さる事もあつた。

竹田先生の教育方針に早く出来た人は外で遊ん

で良いと云う事があつた。算術でも問題が解けると先生の所へ行って丸をつけていただき、そのまま運動場へ出て良いのだ。私の様に出来の悪いのは教室の人数が段々少なくなり外で楽しそうな声がして来ると唯々遊びたくて益々計算が出来なくなるのだった。

二時間目が終る頃から小講堂脇のキャフテリアに通じる暗く曲つた廊下のあたりから良い香がして来て今日のお昼は何かな？と心が踊つた。白い茶のふちどりのあるテーブルと同じデザインの丸椅子が並んだ食堂は奥のお山に近い処だけ一段高くなつてゐた。キャフテリア形式で調理室と食堂の間のカウンターで電車の回数券の様な金券と引き換に温かい食事を受けとつた。一食十五銭の金券には楓のマークがついて食堂の前の小さな購売部でノートや鉛筆と同じに買う事が出来た。白い楓マークのついたお皿に七分搗きの御飯が型抜きされわきにおかずの添えられたランチであつた。献立ではシチュー、フライ、天ぷら、筑前だき等でひな祭やクリスマスはフルーツ、デザートつきの御馳走が出た。お汁物も時々あり、蒸茶碗の形の器が使われていた。好きな友達と並んで食前の祈りは先生がよく「身も心も丈夫に……」と仰云つたのを覚えている。食事が済むと竹田先生に全部残さず食べた。とか〇〇がきらいで残しましたとか報告するので〇印がいただきたくてきらいな物も食べた。家庭ではどこも白米ばかりの頃に健康のために七分搗きなのが家で話題になつた。一寸時間がたつと型抜きされた御飯は表面がカサカサした感じになつた。そのキャフテリアで四年生の時に赤痢が発生し新聞にも報道されて大騒ぎになつた事がある。初夏の頃だつたと思うがその日の献立はお魚とカボチャの煮付、キュウリとキャベツの塩もみであつた。其のキャベツに問題があつたらしかつた。何しろ私は其の日残さず食べて大

威張りただけに赤痢になるのではないかと心配した。幸、姉も私も病気にならなかったが長い休校の間、学校の事が新聞に書き立てられる度家中で肩身のせまい思いをしながら早く平常にもどる様にと願った。日支事変も本格的な戦争になり外国人の校長様は好ましくないとの圧力があったのではないかと思うが当時の校長先生は小野先生だったが間もなく脇山校長に替られた。其の後キャプテリアは閉鎖となり再び開かれたが間もなくお米の配給に伴いお弁当持参が当り前の様になった。

私達のクラスは三年から卒業迄を中沢先生に受け持っていた。何事も変化には一応反対するのから学期始めに受け持ちの先生のお名前が発表されると「イヤデース」とか「アラー」とか平気で云う私達であった。中沢先生も竹田先生同様に愛しく育んで下さった。テストの結果が思わしくない。「皆さんがこんな点しか取れなかったのは私の教え方が悪かったのと皆が一所懸命にならないからです。お母様方に申し訳なくて先生は切腹してお詫びしなくては…」と仰云りもう一度よく教えるからあなた方もよく聞きなさい」と勉強のやり直しをして下さった。私達は先生の口まねで一寸点が悪いと切腹切腹なんて云ったものだ。今の様に落ちこぼれとか切り捨て等想像もつかない事である。個人的なお残りもよくやった。成績が悪くてお残りしても大して恥しいとも思わないし又出来る子が出来ない子をあざける事もなかった。小羊に載せるために今一押しするとこの子は伸びる、と思われるとお残りさせてお習字を書かせたりなされた。中沢先生はクラスの文集を私達の手で作る事も教えて下さった。皆の綴方を集め膳写板で原紙切りから全部生徒の手でやった。放課後有志の人達で絵の得意な人はカットを書き、字の上手な人が蠟紙に鉄筆で書き、其の他は手を真黒にして印刷する。原紙切りで字を間違えた時

はクレヨンで塗りつぶすと何とか直せる事も教えて下さった。時間の経つのも忘れて暗くなる迄やっていると特別にお八つを下さったり結構楽しく文集作りをやった。私は三年後半から大森へ引越して通学が歩きから一挙に省線と市電を使う通学になった。

三四年の頃と思うが学校に農場が出来た。女学校は花小金井、初等科は成増に郊外学園と称して一ヶ月一二度位出かけたと思う。池袋集合とか高田馬場集合とかで電車に乗り慣れると一人で初めての所へも行ける様になった。馬鈴薯の植え付けには切口に灰をつける、又さつま芋のつる返し、いやな雑草とり、楽しいも掘りの後落葉を集めてのやきいも、大根を抜けばふるふき大根にして下さった。生れて初めて鍬や鎌を手にした。「輝の芝生」で思い切り寝ころぶと青い空が目にも痛い様だった。フットベースや大縄とび、普段は出来ない木登り迄やった。一度木登りをして木の上でお家ごっこをやって居て集合の笛が聞こえず五六人束になって行方不明になった事があった。電車の時間があるので他の生徒は皆駅へ向って出発し一人残って私達を探して下さった先生と一緒に駅迄走り走って皆に追いついた事もあった。こゝへ来る時はセーラ服ではなく衿と半袖のカフスの黄色い大好きな体操服でリュックサックを背負っ



1936年3月20日 幼稚園卒園式

た。ブルマーでなくひだのあるセパレートスカートは中々素敵だった。

世界状況が段々と怪しくなって来た五年生の二学期に先ずピアノ科のミセスヘニガーが御帰国になった。ピアノ科の諸先生から一人ずつ弟子が選ばれて送別リサイタルが催される事になった。宮沢先生は女学科の生徒と初等科から只一人私も参加させられた。当時は送別演奏会がそんな大切なものでしかも初等科からは私一人等とは夢思っても居なかった。当日私は突然の発熱で欠席しそのまま半年間休学するハメになったので其の日の事は妙に忘れられない。何しろ一年入学以来無遅刻無欠席で通した私が休んだのでクラスは大騒ぎだったらしい。(姉が初等科へ私の事情を話に行った)リサイタルは盛會に終り流石に上手な人ばかり選ばれていたと聞いた時私はキツネにツマメタ気持ちになって了った。数日後姉は横浜港へミセスヘニガーをお見送りに行きテープを投げてオセンチになって帰って来た。絶対安静で寝かされた私は西洋人の先生が段々御帰国になり英和はどうなつて了うのかしらと思った。物資も少しずつ不自由になり始め、配給とか行列してお菓子を買うとかが日常的になって来ていた。中沢先生は遠い大森の家迄よくお見舞に来て下さった。私の枕元でやさしく学校の様子を話して下さり、「あなたの病気は熱が下がったら直つたと云う様なものでないから気長に養生しなさい」等と仰云ると私の目からスーッと涙がこぼれ一寸あわてていらした事を思い出す。少し起きられる様になると姉を通して家での勉強方針を教えて下さり其の進み具合を

みに来て下さった。着物を着た私の手を取って庭を散歩して下さった事もある。「寒くはない?こんなに歩いて疲れませんか?」と気遣って下さり植込や庭石の間を二人で歩いた。突然私が思いついて「先生はナイドン?」と尋ねると「ブタドン」と答えられた。未婚でいらしたから年齢を私達にまで知られたくなかったのかも知れない。美しい面長の先生でいらしたが二十年三月の大空襲で亡くなられたのは非常に残念でならない。

十六年の十二月八日遂に大東亜戦争が始まった。緒戦は勝った勝つたでうかれていた。翌年三月姉は女学科を、私は初等科を共に卒業する事になった。卒業生の入場は一応雨天体操場に集り大講堂との境の扉が折れたたまって開くと中央の通路から静かに晴がましくピアノの壮重な曲に合わせて入場した。其の奏樂を弾いているのが姉であった。姉は数ヶ月前からこの日のために宮沢先生について練習していたが、この曲が式に使われると定めた時、銀座の山野や日本楽器に行っても譜面が無かった。すでに輸入の止つた日本には入手のすべが無くミスハミルトンのお手持ちのを拝借したのであった。当時ミスハミルトンは敵国人として特高の監視するところとなり宣教師館で御不自由な生活をなさり始めていらしたと思う。姉は式の後楽譜を御返しに先生の所へ伺つたら先生が「記念にあげましょう」と仰云つたとかで姉は本当に嬉しそうに大切にしていた。それから二年後の五月の空襲で我家は姉の命もドイツ製のピアノも先生の楽譜もすべてを失つた。

—あ と が き— 18号は、元小学部長の外崎長三郎先生が、昨年、小学部講堂(宗教講演会)で児童にお話し下さいましたテープを起してのせさせていただきました。又その時代の方々が原稿と写真をお寄せ下さり有難うございました。紙面の都合で、割愛させていただきますがお許し下さい。貴重な原稿は必ず、教育の場で役立たせていただきます。

(小学部—張替・竹井)